

日本語教育の周辺を考える

— 国語教育と日本語教育の接点を求めて —

松本利一（札幌日本語学校校長）

潟沼誠二（北海道教育大学教授）

赤坂和雄（本学助教授）

日本語教育の現実

潟沼 私に進行係をということで、これから日本語の教育の問題をめぐって話し合ってきたと思います。日本語教育と言いますと、直ちに国語教育を思い起こしますが、両者の間には非常に越えがたい溝が横たわっているのではないかと。特に最近では日本が大変な経済大国になって世界各地に日本人が進出して、逆に世界各地から外国人がたくさんやってくる。そういう国際化時代を迎えた中で、日本語の教育の重要性が見直されてきていると思うのです。にもかかわらず、先ほどのようなように相変わらずの溝があり、国語教育は国語教育として別個にあり、日本語教育との

間に言語学としてのコンセプトが確立されていないというような状況があるのではないだろうかと思うのですが、まずそこいらあたりの問題点を赤坂先生というふうにお考えになっておられますか。

赤坂 ご指摘のように、その辺の整理の仕方が問題になると思うのですが、今までは外国語としての日本語教育ということが、日本では迫られていなかったということがありました。国語教育一本やりだったというような気がするので。結局日本語教育という言葉が生まれてきたのも、おびただしい数の外国人が日本に入ってきて、日本語を習得し始めたところに求められるでしょう。それにともな

って日本語が我々の中から奪われてきているというような、そういうようなイメージすら感じるのです。しかし、今まで日本人に国語として教えてきた日本語が、外国人に同じような方法で日本語を教えた時いろいろなところに問題が出てきた。どういう問題かというと、結局は我々のやってきた日本語教育というのは、日本語を知っている人たちに、要するに、日本語を母語として持っている人たちに日本語教育を行っていたわけです。ところが、日本語というバックグラウンドの全くない人たちに、今度は日本語をと、いったときにさまざまな問題が生じてきたのです。

ですから、こういうことが言えるのではないかと思うのです。日本人には日本語教育、いわゆる外国語としての日本語の教育を外国人に行うというスキルというか、技術すらありませんでしたし、考えすらなかったと思うのです。だからそこら辺の意識改革、つまり国語教育というのと日本語教育というものをきちんと分けなければならぬとする考え方をするとということが必要なことだと思います。ですから外国人が外国語としての日本語を学ぶというのと、これから日本人になるとか、あるいは日本にこれからずっと生活していくという人を対象にした 第二言語としての日本語教育法というのは、かなり異なってくる、思うのです。ある線まではということでは

すが、その線を超えたら僕はかなり近寄った同じような国語教育ができるかなという気はします。けれども、ただ問題を感じるのは、日本人が今まで行なってきた日本における国語教育です。それがアメリカなんかと比べますと、非常に違うということなのです。その辺の意識改革から始めなくてはならないかなと思うのです。

湯沼 今、赤坂先生から御指摘があった点は重要な問題をはらんでいるようです。やはり日本語を知っている人に教える日本語と、全然知らない人に教える日本語が急に浮かび上がってきて、そうした状況をきちんと考えなければならぬということなのですが、どうもそれがはつきりしていない状況があるように私もあります。やはり国語教育についての、甘い幻想つまり国語教育で日本語を教えているという幻想があるということも考えられるわけですが、国語教育が例えば日本語教育というようなものとして自分の回りに得体の知れないものが近寄ってきたという認識になるのでしょうか。松本先生はどう考えですか。松本 そうですね。先生が一番初めにちよつと言われたのですけれども日本語教育ですね、日本語教育というものがなぜ云々されるようになってきたかと、その辺に私関係があると思うのです。それ、先ほども言ったのですけれども、はつきり言いまして初めはごく一部

の方が日本の文化とか、あるいは万葉・源氏とかその他の古典を翻訳するとかというふうな格好でもって、日本の言語を学ぶというふうなものだったのです。けれども、いろいろ日本語教育というようなことが本当に問題になってきたのはここ十数年ぐらいだと思います。その原因ははつきり言いまして、日本のこの高度経済成長と技術革新です。

この前うちの生徒といいますが、日本語を学んでいる二十人ぐらいの外国の人に話をしたので。これから私が世界と日本とを比べた数字を言いますから、これ当ててごらんさいと言いまして、世界を百として日本は幾つになるかと、こういうふうに言いますから当ててごらんさい、ほとんど英米人です、日本語大体二年ぐらい習っている人もありますが、ほとんど習い始めの方もいるのです。この人たちに一番始めに世界を一〇〇として日本が〇・三%です、これは何ですかと言いましたら首を振っています。では今度世界を一〇〇として日本は二・五%これはどうですかと又、首を振ります。では世界を一〇〇として日本が一七%ですと言ったら、ほとんどの外国の方がOh、GNPと言いました。結局世界を一〇〇としたら日本のGNPは一七%なのです。今ソ連が別になりましたから二〇%ぐらいになっているかと思うのですけれども、世界の約五分一です。これは外国の人

で札幌に来て日本語など勉強している人もわかつている。では元に戻りまして、始め一〇〇に対して〇・三％といったら何かといったら日本国土だということです。世界を一〇〇とするという日本の国のその面積というのは〇・三％しかない、二・五％というのは何かという世界の人口五十億に対していわゆる一億二千万は二・五％くらいです。こんな小さな土地でもってこれだけの人間でもって世界の約五分一ぐらいの生産を上げる、これがつきり言って今の日本語教育というものを進めてきた原因です。

それで今先生も言われた国語教育がそのままだ日本語教育につながらないか、そういうふうな点から言いまして日本語というものは約この二千年、千何千年の間この日本の国だけでもって培われている。ところがヨーロッパなんかに行くと、あそこにある何十という国々はこの二千年の間ほとんど戦争の歴史です。戦争と言いますというと橋一本、山一つ、川一つでもって国が違うというのです。それがお互いに戦争し合うという、そこに知恵もわたり合うし、戦争の結果お互いに結局権利の主張になりますけれども、権利を主張し義務を背負う場合に一番大事なのは、何かというと言語ですね。ですから、そういう国の方々はそういうふうな言語の戦争、言語のぶつかり合いにも歴史があったと思うのです。

ところが、日本は幸か不幸かそれをほとんどやってきていないのです。そして初めて戦争に負けて、今言いましたように、好むと好まざるとにかかわらずほかの国との接触、そこに私は国語教育というものが持ってきた宿命があると思うのです。

国語教育はこのままでいいのか

鴻沼 現在、私自身国語教育を抜本的に見直してみようという意識を持っています。というのは私自身の外国体験があり、アメリカ人に日本文学を教えたり日本語を教えたりという経験があったわけですが、やはりどうしてもぶつからざるをえない壁があるわけです。

それは、例えば我々が習ってきたいわゆる学校文法などはほとんど役に立たないということなどです。やはり、新しい言語学のアプローチがどうして必要になってくるというような面もあり、そういうことを含めて日本語を教えないければならない時代に今は、止むに



松本利一氏

やまれぬというか、好むと好まざるにかかわらずという時代を迎えてしまっているのではないかと考えます。このような状況を迎えてしまったわれわれは、赤坂先生、国語教育の問題だとお感じになっておりますか。いろいろあると思いますが。

赤坂 あるのですね。自分が、国語教育はどんなふうになされてきたかということを思い出すことはちょっと難しいですけども、多分こうではないかなと思うことはあります。まず一つは、もうこれもかなり最近になって言い尽くされていますが、今までの日本での国語教育は言語教育ではなかったということです。言語教育というのではなくて、いわば文学教育というのでしょうか。それはそれで一つの教育パターンとしてはいいのですが、言語としての日本語というものが余にも無視された、わかればいい式の日本語教育、国語教育だったというような気が私はするのです。

一つの例をとりますと、日本語を言語として眺め始めたのは、我々日本人が中学に入っで英語というものを初めて学習した時です。現在では、もう小学校時代から英語を習っている方がたくさんいますけれども、それは別として、そのときになって初めて言語として、日本語を考え直すことになったと思います。例えば話法がそうです。直接話法だとか間接

話法などというのは国語教育の中には出てこなかったです。英語教育の中で出てきたわけです。それで初めて「話法というのは一体どういうふうになっているのか」英語ではわかるけれども、ではそれを日本語で言っているなさいと言うと、日本人の学生はなかなか言えないのです。例えば、「山田さんは明日東京へ行くと言いました」というのを話法を変えなさいというと言えないのです。話法ってなんですかということになるのです。そういうようなことですよね。「山田さんは明日東京へ行くと言いました」と、言う文は間接話法なのです。直接話法で言うためには、かぎ括弧があつて「明日私は東京へ言つてきます」と山田さんは言いました。ということなのですが、こういう練習が日本における国語教育の中で果たしてあつたかどうかです。勿論その頃は何となく出来てきたという印象はありますけれども、実際にはそうやって出来たのです。ただ恐らく時間がかつたのではないだろうかと思うのです。

例えば、アメリカなんかではスピーチという授業が大学にまであるわけです。いわゆる説得力のある話し方、明瞭な話し方の教育です。日本の場合は国語という科目が中学、高校、そして大学までありますが、恐らく不幸なことに中学、高校までの日本における国語教育というのは大学受験を目標とした教育だと言っても言い過ぎではないでしょう。進学のための国語教育でしか僕にはなかったような気がするのです。しかし、それは、やがては役立つと思うし、役立っているとは思いますが。たださまざまな状況に対して日本語を使つて対応するまでには恐らく時間がかかると思うのです。大学生ぐらいの年代になつても、きちつとした手紙すら書けないのです。この辺に問題を感じるのです。

ですから、日本における国語教育の問題点は何だったのだろうかということを考えれば、その辺のことをまず指摘できるかなという気がするのです。

湯沼 そうしますと、荒っぽい言い方かもしれませんが、あえて申しますと、今国語教育は反省を迫られているのに、それに気がついていないという現実があるということでしょうか。このままだと、恐らくこんな今までどおりの国語教育は続いていくだろうが、果たして本当にそれでいいのかという問題になりますね。松本先生はどのようにお考えですか。

松本 それは、私も赤坂先生と全く同感なのですけれども、日本の小学校、中学校、高等学校すべての国語教育のテキストをとつてみたらわかりますけれども、赤坂先生が言つたように文学偏重教育です。

ですから、それに対してのその言語というものの、例えば漢字の構成でも日本語のアクセントなどでも恐らく小中高を通じて勉強しなかったのではないかと思うのです。いろいろな自然に入ってきているものだから。それから私どもはまだそれでも漢字の筆順なんかというのは習いました。だけれども、今の先生はなかなか筆順というものを教えてくれない先生もいるようです。

そういう格好でもって、一つはやっぱり大学における国語教育が旧態依然、言つたらおかしいのですども、これぐらい日本語というもののが世の中でもってだんだん見えてきているのに、新しい意味の日本語に余り関心と理解を示さずに、昔と同じような国語とそれから言語学、それからそういうふうな形の国語教育をやつてきているのではないかと思うのです。

ですから、やはり言語教育というものにもっと力を入れる必要があると思います。要するに日本語教育というものを大学でもって実際に先生になる人にどれぐらい教えているかというところ、これは本当に少ないのではないかと思います。これは私は思っているのですけれども、そういうふうには私は思っているのですけれども、湯沼 それで、私自信例えばそういう一種の国語教育の現実というものの、あるいはその日本語を言語としてとらえるというような態度が全く欠けていたという、そういうその要因の一つに、やはり戦後の国語教育の問題とい

うのも私はあるように思うのです。

例えば、国語審議会ができましたけれども、やったことは何かといったら漢字をどれだけ制限するかということ、それから送り仮名を今後どうするかということがともにやってきたことになって、いわゆる何といいますが、例えば美しい日本語はどうあるべきかと、それから今松本先生おしゃったようなことも含めて、文字と濁音とかアクセントというものをどんなふうに教えていったらいいかなどというのは、全く取り上げられていなかったのです。

ずっと歴史をさかのぼってみますと、逆に明治三十年来あたりに文部省が結構いいことをやったのです。国語調査委員会という名称のものを作りまして、言文一致にしなければ国家として成り立たないという意識があったわけです。ばらばらでは困るということで、国語としての日本語というものを確立していくとしました。いろいろな地方にでかけて調査したり、あるいは教科書をどうするかというようなことをやっていたわけです。そういう面で言いますと、何か戦後の国語審議会というのはちよつとやっばりおかしかったなというような、そんな感じも実はするのです。現在、それでは文部省はどうなのかというと、やっばり先ほど赤坂先生がおしゃったように、帰国子女の数がふえたと、それに対し

てどうしようとか、あるいは中国から残留孤児が帰ってきた後どうするかというような問題で尻に火がついて日本語センターみたいなものをぱつとつくってしまった。ところがその中身が問題だということになってしまっている。これは我々も足元の札幌市なんかでも同じ問題を抱えているみたいです。公的機関が、対応できないでいるという現実がやはりあるのだと思うのです。

潟沼 そういうことを踏まえながら、先ほど赤坂先生が日本語というものを第二外国語というような形、つまり第二外国語というような形で、そういう考え方でとらえるということと、それから全く外国語でとらえるという人が現に今いるということを踏まえて、日本語のあり方といえますか、これからどういふに日本語を教えていくのかということについて、赤坂先生の日頃のお考えをもう少し詳しく……。

松本 今せっかく審議会が出ましたものですから、先生のお話にいくまえに、やっばり国語審議会、前の調査委員会も含めて特に戦後の二十年、二十一年。二十一年にはアメリカの教育使節団なんか来まして、日本の文字を下手するとローマ字にしようとか、あるいは志賀直哉の日本語などというのはこんなわからない言語はない、フランス語を国語にした方がいいとか、あるいは谷崎潤一郎などは、

日本文法などというのは覚えていると、ろくな文章は書けない、文法など覚えられない方がいい。など支離滅裂でした。私はやっばりこの戦後の国語教育審議会を引くくめて、余りにも日本の言葉全体を見ないで、文字表記だけに焦点を当て過ぎたのではないかと思います。二十一年に当用漢字をつくって五万もある漢字を絞ってあれも大急ぎで千八百五十字にした、下手するとローマ字化されるというおそれもあったのでしようけれども、その後でもって送り仮名のつけ方をやった、ところが送り仮名のつけ方をやったら、あのとおり、もうてんやわんやになったのです。審議会がつぶれてしまった。拙速というのは大きな問題の一つなのです。

この審議会自体もやっばり非常に文字表記のことだけに焦点を当て過ぎたのではないでしようか。もっと広く日本語全体を考えなければならなかったのではないだろうかと思えます。文字表記というのは大事なことで後に出るかもしれませんが、それに余り片寄りすぎた。

それともう一つは、私、戦後の日本語といいますが、国語政策というものが決して明らかにっていなかったと思います。文字の問題といつても、一体これをどんなふうに考えていていつてローマ字にするのだろうか、あるいは平仮名を主にするのだろうか。その点が

不安だったのが、ようやく昭和五十六年、常用漢字表になって千九百四十五字、漢字を増やした。ということは、漢字の持っている効用というものをもう一遍見直したのです。それでもって前向きになってきたのです。そういうふうな格好でこの国語に対する国の腹構えがふらふらしていて、やっと五十六年ぐらいいなくなって一つの根元が出てきたのではないかと、こんな感じがして。そういうふうによつぱり日本の国自体が先ほど言いました国語というものの一分野にしか視線を当てなかった、その一分野でさえも今の日本のようにふらふら路線が揺れていたと、そういうところに私どももやつぱり国民の揺れがついていかざるを得なかったのではないかと、そんな気持ちがいたします。

日本語という言語について

潟沼 今の松本先生のお話と関係があることなのですが、例えば昭和五十二年の学習指導要領に初めて言語事項が盛りられています。表現領域とかあるいは理解領域、言語領域という三領域の中で、言語事項を大事にしようという考え方です。すごいなと思って教育の現場を見えますと、実は先ほどから話題になっているいわゆる日本語を言語学の側面からとらえていこうというような発想はほとんど見られません。



赤坂和雄氏

例えば、文法教育をしつかりしようとか、あるいは音読をやらせてみようとか、その音読も文学偏重の教育につながるような形のものでしかなくて、例えばその日本語はほかの外国語と比べたらどんな特徴があるかとかというようなことは全く教えてないと思うのです。

つまり、どちらかというと、純粹培養の中で日本語を取り扱っているためにかえって日本語の特色が逆に子供たちに伝えられないでいるという現実があります。だから先ほど先生がおっしゃったように英文が自分の目の前にあらわれたときに初めて「ああ、日本語というのとは」というような感じは必ずあると思うのです。先生、こういう国語教育についてどう思われますか。

赤坂 まさに、異質なものが入ってきて初めてわかるということは、我々の常だと思うのです。最初に先ほどの話にちよつと戻りたいのですけれども、不思議なことに、考えてみ

ていただきたいのですけれども、今、日本の大学で英語の先生をつくるというのが、英文科だとか英文学科だとかいうのがありまして、英語の先生をつくる数、そして教員免許証を与えている数というのは、おびただしい数になっているのです。

松本 それはもう中学校、高等学校の先生。

赤坂 ええ、先生としての。ところが、日本語の先生は、我々日本にいながら、英語の先生はつくるけれども、日本語の先生はどうかといった時に、全くなかったのです。やっと今、文部省が動き出したのです。それでようやく数えられるほどになったのです。

松本 現実に大体その日本語の先生を養成する大学というのは幾つぐらいありますか。

赤坂 今ではもう、大体十から二十になったろうと思います。ですけれどもそれまでは全くなかったです。ましてや大学院の課程もなかった。ですから、大学院が筑波に今度出来たのですが、彼らが卒業して、教壇に立つて、いわゆる先生方をまた作っていくというのは、まだ十年ぐらいかかるのではないですか、恐らく。ひとつは、そういうような状態だということです。私はこれは非常に不思議な現象だと思います。

またこういうことも不思議だと思うのですね。我々「国語」というのは平然として何の抵抗もなく使っていますが、この地球上には百

八十三カ国ぐらいあるのですが、そういう国で「国語」というふうに言っている国は恐らく幾つあるかということなんですが。ほとんどないのではないのでしょうか。

松本 ごめんなさい。英語に訳すとナショナルランゲージということですか。

赤坂 そう言っているのだらうと思うのですけれども。「国語」というのは「俺たちの言語よ」という感じなのでしょう。ですから、そこで一番私が困ることは国語の先生を外国人に紹介するときなんです。国語の先生というふうに日本語で言えるのならいいのですが、英語で言うときに国語と言えないからジャパニーズティーチャーと言って私は紹介してしまふ。そうすると、「あゝ、ではあなたは日本語の先生ですか」ということになってしまふ、というような問題をがあります。「いやいや、私は日本人に教える国語の先生ですから、あなた方、外国人に教える日本語の先生ではありません」というような対応の仕方をして逃げて行ってしまう先生がいました。

このようなこともありまふので、この辺で本当に私たちは意識を確立しなければならなと思うのです。そういう意識を持って、日本語の教育法というのですか、教育の方法の確立というのですか、そういったものを考えなくてはなりません。今にかくやっていますけれども、こうやって見えますと、大学が動

き出すよりも先に町の塾、いわゆる学校として認められていない、大学として認められていないところの学校が、日本語教員を、世の中にどんどん送り出している。それで今度はあわててそれこそ国が日本語教育振興協会などというのも作り、それは俺たちが認める組織にしようなどというような形が、何かいつでも日本のやり方は火をつけられて、後ろから後手後手で、きているというような気がするのです。

ですから、本当にもっと長期的な展望でやっていっていただけるといいなと、こう思います。

それから、もう一つ、ついなのですけれども。一般の大学で行っている、いわゆる教職というのがございますね。そこで国語の先生を養成したり、英語の先生を養成したりしてるわけですけども。私は日本語の先生、外国語としての日本語の教員をつくる学校よりも、力がかけてられないような気がするのです。このあたり先生はどう思いますか。結局はどういうことかと言いますと、日本語の教員をつくるのは大変なことだということなのです。私たちは日本語のネイティブスピーカーなのに大変なものが要求されています。そしてその試験を突破しなかったら「あなたを日本語の教師としては認めない」というような試験をやっているわけです。あれは落とす

ための試験のように変わってきているような気がするのですけれども。ですから、そういうようなことなのに外国語となるとちよつと違うような気がするのです。だからそのへんのバランスも非常に私は違うようなものを感じるのですけれども。

湯沼 教員養成のお話が先生の方からお話されたのですけれども、もともと国語学という学問そのものに本質的に関わっていく問題がかなりあるのではないかなと私は思うのです。それはどういうことかと言いますと、日本の儒学者で江戸時代に伊藤仁斎が古義学という学問を打ち立てました。これはちよつと見方を変えてみますとあえて言いますが、言語学なのです。それから荻生徂徠の古文辞学も、本居宣長の古学にしても言語学的な要素があるのです。日本にはヨーロッパの十九世紀におけるような近代言語学みたいなものがなかったというふうに言われているのですけれども、私はそうは思わないのです。厳密に言えば確かにその通りなのでしょうが。一種の国粹主義といえますか、先ほど先生がいみじくもおっしゃった国語意識、これは自分たちの言語が独特の言語であり、その言語によつて表現される幽玄だとかさびだとかわびだとかは、外国人にはわからないのだらうというような考え方につながっていくような傾向が、例えば国語学を考えた場合に、あつたように

思うのです。今、先生は意識改革とおっしゃったわけですが、それを一回解体してみなければいけないのではないかというような気がします。

ただ、問題はそういう意識改革をするというようなことを考えても、日本の学校の現状は、大学入試とか高校入試で試験さえ通ればそれでよいということでしょう。だから、このような国語学の伝統に連なって国語意識を変えていくのは難しいなと思うのですけれども、この点についてはいかがでしょうか。

赤坂 全くそういうような考えから我々が脱皮できないというのは、やはり、日本というのは何だかんだ世界的にこれだけ牛耳っているけれども、まだまだ島国根性というのからは抜け切っていないと思うのです。

まず、日本人の頭の中に一つの図式が考えられるのです。日本というとき日本「人」というのです。そしてそれに「語」がつくのです。日本語となるのです。日本―日本人―日本語という図式を持っているのです。

ですから、例えば、フランスといったフランス人でフランス語、ドイツといったドイツ人でドイツ語というような図式の持てる国はいいのです。勿論こうばかりとは言いません。問題はありませんが。しかし、そこだつて問題はありますけれども。しかし、ではフィリピンというフィリピン人、そこまでは

いいとしても、フィリピン語とかどうか。ニュージーランドというニュージーランド人はいいのでしょうか。ニュージーランド語とかどうか。オーストラリア、オーストラリア人、オーストラリア語とかどうか。だからそういうようなことが実は、我々は本当に日本―日本人―日本語という図式を持つのは、この世界では実にまれに見る国だったということを我々は知らなかったのです。我々は日本の中にいますので、そういう図式を持っていて世界もそれに当てはめようとする。そうしていったと思うのです。

ですから、本当にそういったことを考えますと、この地球上に言語がどれだけ存在するかということ、よくびつくりされることなのですけれども。学者によって違いますけれども三千から三千五百、いや四千だということもいるわけです。そうすると、国というものとの図式がそこで成り立たないということが当然あるわけです。ですから、そういうことになりますと、スイスと言うと、スイス人でスイス語というのか、というような図式にぶつかったときに、我々ははたと、困るというようなことがあるわけです。ですから、やっぱり意識改革というのですが、そのへんの、まず先生の先ほどのお話ではないですけれども、ばらばらにして組み立てていってみるとというようなことも必要になってくるのではない

かなと思います。

松本 鴻沼先生も触れられましたように、春満(荷田)、富士谷成章、宣長もそうですが、確かにねらっているものは言語学の源なのです。だけれども、先程言いましたように日本の学校教育が文学教育でもって追われていると同時に、あの言語学とそれから物の哀れとか、あるいは悲しさだとか、をかしだとかいうような平安朝時代の情緒的なものを比べた場合に、やっぱりその文学的なものが拾われて、言語学的なものがどっちかというと後にされてしまうのです。

先ほど、文法の話が出たのですが、私も日本語の教員養成科で文法の講義をするのですが、日本語文法に取りかかる前に国文法をやるのですが、これが全然出ていない。現代仮名遣いのおかげで動詞の四段活用が五段活用になった、それなら音便形はどうするのか。連用形が日本語文法の「て形」などと係って大事なのですが、用言というのがつかめていない。それから助詞です。助詞の働きも非常に大事なのですが、そういう基本的ないわゆる国文法というものは、ばかにされたのですけれども、その国文法の知識が全然ないのです。これはやっぱり先ほどの言いましたように、日本の国語教育における文学偏重というものは、ここまで災いしてきたかと。ですから、もう一遍その国文法の復習からは

じめなければならぬ。

日本語をどう教えるか

湯沼 どうせわからないのであれば、今の国文法のいわゆる枠組みをとっぱらってしまつて、むしろ外国人に教えているような方法論を、かなり蓄積されたものがありますから、それで文法を教える試みをしてみたらどうかなどと考えてみたりはするのですけれども……

赤坂 そうですね。ただ、例えば、今ちよつとその話を、日本における外国語教育にひっかけて考えてみますと、今は日本における英語教育で、コミュニケーションのための英語教育というのですが、今盛んに議論されるようになってきているのです。

それで、それとひっかけますと、まず最初は兎に角わかる言語教育であるということからスタートをしていると思うのですが。私たちが外国語を勉強するときには、確かに英語の場合は、前置詞が難しかったり、あとはその語尾変化したり、日本語に比べますと英語なんて、もつともつと難しいと思うのです。そういう意味では。そういうようなことに平然と、間違つても、とにかく通じればいいというところからスタートしようではないかというの、今の考えになつてきているのです。

そこからある程度いつてからそれを直していけばいいという考えです。そういうことと日本語に置きかえて考えてみると案外面白いのではないかと思つたのです。

湯沼 このように国語教育とか日本語教育とかに関わる、特に言語の問題を考えますと、今先生のおっしゃつたこれら英語教育の問題なんかも、何か根っこに国語教育に見られるのと同じような、言語に対する日本人の独特の考え方があってはないかと思うのです。

文学偏重だというふうにくくつてしまえばそれまでなのですが、もつと何か言語に対する別な意識があるように思われます。例えば英語だつてそうですが話せないでそれで文法がわかるかといつたらわからないのです。そうしますと、もともと日本は言霊の幸はふ国だから、その霊の方ばかり重視されて言の方がなかなか意識に上つてこないのかなというような、そんな感じもしてしまうのですけれども。もうそんなことも言つてられないような時代になつてきているなと思うのですが。

赤坂 先生ごめんなさい。先生のお話に入つていく前に、私は今日日本における英語教育の話が出たものですから、今までの日本における英語教育が教育者にとつても学習者にとつてもハッピーだったのかなということをちよつと考えてしまふのです。決してハッピーで

なかったという気がするのです。というのは、むしろ言葉を返して言えば不幸だったと、我々も含めて。初めて日本に外国人の先生が来て、英語教育が始まつた時代の人たちは幸せだったような気がするのです。恐らく松本先生ぐらいの年代の方たちは、そういう良い教育を受けられたのかなと思うのです。

ところが、何が不幸だったかと言いますと、結局は日本における英語教育というのは受験のためだったのです。ですから、その中には、楽しさなどというのは全くなかったのです。結局受験受験、それだけのための外国語教育でしかなかったということ。本来は外国語の学習というのは楽しいはずなのです。例えばアメリカ人なんかは日本語を勉強しますと、教室の中はわんわん楽しいのです。そして、本当に彼らは、習つたものを絶対使いたいのです。音にしたいのです。そういうような教育には日本ではなつてなかつたです。そういう意味で私は不幸だったと思うのです。

湯沼 いや、これは大事なことです。大事な指摘です。そうですね。

松本 それはどうですか、もう少し突っ込んでいうと国民性というか、私なんかも一カ月ちよつと外国の教育というのを見てきましたけれども、やっぱり向こうヨーロッパ、アメリカもそうですけれども、どの授業見ても

まず生徒が手を上げて積極的に自分の意見を述べます。自分の個性を「私はこういう考え方を持っている」そうすると向こうの方から手を上げて、「いや、私はそうは思わない」と、こういうことの競い合いが当然出てくる。日本は幸か不幸か一斉教育がずっと長い間現在もそうですけれども、飛び出ないみんな同じような教育、そこで物言わない教育という、こういう教育がなされてきて、それが習い性となつて身にしみついてきている。ですから日本はなるべく自己を出さない、向こうはものすごく自己を出す、それが今先生言われた言語教育、言葉の学び方にもはつきり出てきていると思います。

それに先生、残念なことにやっぱリクラスサイズによつたと思うのです。まずクラスの人数が多かつたということです。ですから、これを脱皮しないことには、恐らくこの教育はまだ百年続くのでしょうか。そういうことになるのではないかと思うのです。

ですから、例えば今日日本語の教育をあちこちでやっていますけれども、せいぜい生徒が十人でしょう。十人とか十五人です。それが今三十人だ四十人だとやっているわけです。ひどいのになると五十人だ六十人です。ですから、やっぱリそういったものをまず解決できない限りは、今の問題は解決できないのかもしれないのですね。

一口に教育といいますが、日本の教育はこれは小学校から大学まで引つくるめて「教える方」なのです。教の方が重視されるのですけれども、育の方、「育てる方」がどっかへ行つてしまつていふと思うのです。

潟沼 昌平黉という学校が江戸時代にあります。例の林大学頭が中心になつて朱子学を教えた湯島聖堂のことです。その江戸時代の昌平黉の授業風景を描いた絵があるのです。それを見ましたら一人の先生が見台の前に座つてその上に本を上げて朗々といわゆる本文を読んで解釈していくわけです。

非常に面白いなと思つたのは、その絵に限つては学生達はノートを持つてないのです。耳で聞いているのですね。その絵を見て二つのことを考えました。一つは今の一斉授業というのはあれからきているのだ。あれと全然変わりないのだなというのが一つです。要するに秩序があつて、絶対的ないわゆる権威を持つた先生が話していることを一言一句漏らさず、そのそれをそのまま受け止めて聞くということが一つ。それからもう一つは、いい面があるとすれば、いわゆる音を漏らさずに聞こうとしていふこと。私はここに、つまり耳で習うということに何か外国語教育のヒントになるものがあるのかなという気もしているのです。

赤坂 リスニングですね。

潟沼 ええ、リスニングあるいはヒアリングなのです。そういうことを含めて、話し合つていきたいなと思うのですけれども、もう余り時間もありません、これまでに例えば日本語を教えるということのために必要な条件は一体何だろうかということ、またその背景というか土台というか、そのようなことをいろいろ話してきたのですが、最後にこれだれは言つておきたい、また今後こういうことを考えていくべきでないかということについてお話をしていただきたいのですけれども、松本先生いかがでしょうか。

松本 そうですね。これはひとつ赤坂先生の方が専門ですから先に先生言つてください。そのあと赤坂先生からこぼれたところを拾つてみます。

赤坂 そんなこと言われたらかえつて恥ずかしいのですけれども。まず一つは日本語をどこで教えるかということ。それは日本で教えるか、それとも外国で教えるのかという、まず二つがきちつとわきまえられた教え方ということです。すなわち、日本で教えるのかアメリカで教えるのか。日本で教えるのか中国で教えるのかということなのです。そうすると、当然そこでは教授法が変わっていきます。それともう一つは、何語人に日本語を教えるのかということなのです。すなわち英語人に日本語を教えるのか、中国語人に日本語を教

えるのかというようなこと。

それから、教える先生が、その教わる学生の言語、母語です。その学生の母語に精通しているかどうか。私は精通していなければならぬと思うのです。それは日本語の授業の中でその言語を使うという意味ではなくて、この人にとっては日本語の何が難しいかということ考えたときに、この人は英語を話す人だ、英語人だから「あつ、この人は日本語のこれが難しいのだ」と。しかしフランス語人にとっては、この英語人と同じような難しさを同じように感じるかといったら、決してそうでないことが結構あるのです。

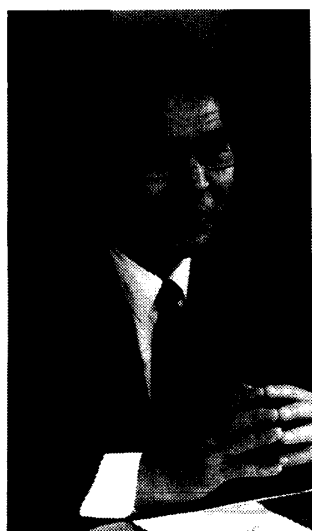
ですから、結局は相手の持つ言語によって教授法が変わってくる、そういうような教授法の確立が必要だと思います。

ですから、今うら返して英語教育のことになるのですが。これは幸か不幸かわかりませんが、私たちはみんな日本語人なのです。ですから、日本語人に英語を教えるときには、日本語人は一体英語のどういったところが難しいか、どういったところが不得意なのか、どこらへんが理解できないのかというようなことを、わかって教える。そういうようなことが、今まで余り研究もされてなかったし、それを言語学の分野での応用言語学といったらいいのでしょうか、そういった研究も、余りなされていなかったような気

がするのです。ですから、そういったものの分野の研究もこれから、盛んに行われていかなければならないというふうに、私は今考えていますけれども。

湯沼 どうもありがとうございます。先生いかがでしょうか。

松本 確かに今言ったように、昔はただ日本語を教える日本語を学ぶでよかったのですけれども、先生の言うようにきめの細かい対象とそれから一体何を求めているのかということとをきちつと分けて、それに対応したやり方、日本語を教えることが必要なのではないでしょうか。私、最近自分で実際にやってみてののですけれども、漢字系でなくて非漢字系の方たちに漢字を教えているのですけれども、今までの日本の教育というのは要するに非漢字系の人たちにはどうしてもカンバーセイションです、リスニングとヒアリングが主だったのですけれども、本当にある段階から日本語をつかんでいくためには、どうしても漢字を覚え



湯沼誠二氏

てもらわなければならない。というのは、日本語の表記というのは確かに独特だと思うのです。漢字、仮名、平仮名、場合によってはローマ字も取り入れる。だから、それがつかめなければ新聞もあるいは工場で働くいろいろなマークも交通標識もわからない。ですから、どうしてもカンバーセイションだけでなく、漢字、仮名交りのいわゆる文字表記をひとつ勉強してもらわなければならないのでないかなと、こういうことをこのごろ自分で感じております。実際に教えてみて。

湯沼 実は先ほど赤坂先生が指摘されたのですが、今の大学生は手紙もろくに書けないというようなこと言いましたけれども、総体的に日本人の語学力は落ちてきていると思うのです。幼稚園のときから言葉をしゃべるといっても叫ぶといいますが、言葉にならない叫びが飛び交うような感じなのです。そういうことを考えてみますと、やはり言語の教育をつま、現在の国語教育に欠落しているいわゆる日本語教育を実施試行して見る必要があるのではないかという気がするのです。

それからもう一つは、例えば我々身近なところで何かやる必要があるような気がします。札幌でいわゆる帰国子女や中国からの残留孤児、外国人がどのくらい来ているのか。あるいはここに働くために来ている人がどのくらいいるのか。そういう人びとに対応するよう

な日本語教育に興味を持っている人が集まって、いわゆる基礎研究なりそれを応用するなりというような方向でわれわれの住む札幌あたりで先ず実行していけたら、いいのではないかなという気がするのですけれども。

赤坂 もう一つつけ加えさせていただきたいのですが、先ほどの言語教育についてなのですけれども、やっぱりもう一つそれと大事なことは教わる学習者のニーズということを考えてあげなければならぬと思います。

それから、たまたま松本先生が先ほどおっしゃった漢字の教え方です。それについて一つ、成功例があるのです。その成功例というのはこういうことなのです。我々は顔を見ますでしょう。すると「あつ、松本先生だ」とすぐわかるし、何年も会っていないくても、鴻沼先生と町で会うと、「ああ、先生」と顔で覚えてるわけです。顔、形で覚えてるのです。私は漢字をそういうふうに教えるということなのです。

ですから、いわゆる、書き方を教えるのではなくて、漢字の形で教えるという、言わばピクチャー化する、そういうことで教えて大変な成功例があるのです。

それで、彼らは我々が読むのと同じような調子で読めるのです。一つ一つの文字を読んでいくのではなくて、例えば、「明日は東京へ行って参ります」と言ったときに、「明日」とい

うときは私たちは漢字で書きますね、普通は。それから「東京」も漢字で書きますよね。「行く」というのも漢字で書きます。それから「参ります」というのもひよつとしたら漢字で書きますよね。そういうのは全部、初めっからその方法で教えるのです。こま切れでは教えないのです。そうしますと、その文章を見たときに、「明日は東京へ行って参ります」というのが、自然に読めるようになるのです。そういうことで、ぼんぼんフラッシュカードで教えていきますと、ものすごい勢いで覚えてしまうのです。

今のは、本当に一つの例なのですけれども、とにかくどんな難しい文字だっていいんです。例えば「臨教審便り」というのがあったとしても、これも文字でやると難しいです。ひよつとして書けないかもしれないです、書いてくださいと言ったときに。だけど、それを読めるようになるんです。しかし、それをすぐ書けないということは、顔は覚えるけれども、鴻沼先生の顔は描けないです。絵が上手だったらかけると思うのですけれども、それだけさちつととらえられますから。しかし、そういうようなことを学生に要求していくと、漢字は形で覚えていってしまう。書けるようにするのは後の問題でいいのです。そういう方法で、まず聞くこと、それから話すこと、読むことなのです。読む理解です。認知出来る

かどうかなのです。書くことなどというのは自分でやってくださいと言っても良いのです。

松本 これは先生の言うとおり漢字は面です。それから平仮名、カタカナは点です。点々とこれは面ですから、この面というのはものすごく先生が言われたように、初めからこの面というものをつかませたら、これはものすごいメリットなのです。

赤坂 そうですね。非常にうまくいきました。ですから、まずそういうことと。

それからもう一つ、文章表現を先ほど鴻沼先生が、今の若い人たちは叫んでる、単語を言っただけで叫んでるおっしゃってました。そういう教育ではなくて、文章できちつと言えるような人間をつくるのが重要なのです。これは一体だれが悪いかというと、やっぱり回りの大人が悪いのです。そういう教育をしていたのです。例えば、母親がまず小さい子供に「よっちゃん、はい、立って」、「立って」ということは子供用語です。「立って」というと立つのです。それはいいのですけれども小さい子供に、「はい、立ってください」というと、何となく変に感じてしまうのです。これは幼児の言語です。表現方法です。そういったことから余り脱却できないのです。アメリカにいた時キャンプしてたのですが、キャンプ場で小さな子供たちとキャンプをし

てたのです。その時先生の所に十歳くらいの子がやってきたのです。僕はちょうどその先生とお話をしてる時でした。そうしましたらその子がやってきて、イクスキューズミーと言ってきたのです。それでその子が話し始めた時、その先生は私と立って話していたのですけれども、その子は小さいです。その先生はその子と同じ高さにしゃがみ、その子供の言うことをきちつと聞いています。そしてそれにはつきりした受け答えをしていました。恐らく日本だったら「今ちよっとお客さんとお話しているでしょう、その話は後で言いなさい」とかなんとか、やったかもしれない。その先生はきちつと私にイクスキューズミーと言って、この子供にきちつとした文章の表現で対応していた。私はあれを見て「あつ、これなんだな」と思ったのです。文章表現といいますが、文章を教えるということ。

ですから、ただ単に単語を言って叫んでしまうというようなことを日常的に何でもないかのように処理しているということ、私はそのへんにも大きな理由があるのではないかという気がするのですけれども。

松本 私は、その先生の先ほどの文章表現でもって思い出したことが二つあるのですけれども。一つは、今の学校教育でもって、さっきちよつと昌平黌の話ができましたけれども、

音読というのはさせないです。せいぜい小学校です。中学校へ来たらもう音読しません。

ですから、先ほど文学作品のことが出ましたけれども、文学偏重はいけませんけれども、文学作品でも何作品でも音読させる。これは国語に限らないのです。社会科でも理科でもその音を出して読んで、それを先生が、もし間違っていたら直す。正しい読み方をしてほかの生徒にほめられる。音読がなくなってきたということが一つと、もう一つは、私はやつぱりこれはテレビの氾濫です。ラジオはよかったのです。ラジオは耳で聞いて、耳でもって伝えて、耳で聞くような音をきちつと正しく言っただけでも、テレビになると、場面でもってその場面がすっかり言葉を省略してしまうわけです。ですから叫びでよかったのです。その場面だけを提供して叫びだけが提供されるテレビがものすごく氾濫してしまつた。それがやつぱり子供にマイナスの教育をしてしまつていのではないかなという気がします。

今後の課題

潟沼 やはり日本語教育を考えていきますと、何と云いますか今の討論の中でもありましたけれども、結局はただ単に日本語教育にとどまるのではなくて、その周辺にいろいろな問題が浮かび上がってくるということになりま

すね、その中で大事なことは、やはり言語をあくまでも言語としてもっと大事に考えていくというか、あるいはいとおしんでいくというのかな、そういうことがなければ外国人とのつき合いだつてうまくいかないし、外国人だつて日本人とのつき合いもううまくいかないというような、そういうことになるだろうと思うのです。これを機会にして何かもつと、例えば赤坂先生の今おっしゃったようなそういう成功事例を個々に置いておくというのではなくて、そういうものをまとめてマニュアル化していくみたいな、そういう運動の母体みたいなのが欲しくなつてきますね。

松本 これは先生がお話したように、全く逆な発想から切り込んでみたいのですけれども、赤坂先生先ほど言われましたが、日本語の先生をつくるのに、主専攻で四十五単位ですか、副専攻で二十五単位ですか、今大体全国に大学と称するものが一千ぐらいあります。その中でもって恐らく二十か三十ぐらいしかないと思うのです。日本語の養成をする大学がなぜか。尋ねてみるとそういう日本語の専門の学科を出した学生が、では日本語学校の先生になつていくかというとなんならないそうです。みんな雑誌社とかジャーナリズムというところへ入つていく、それは日本語の先生というものが社会的に遇されていないからというのです。日本語の先生では飯が食えな

い、飯も食えないところへは人材が集まらない。それなら日本語の先生がもっと社会的に遇されて、それから飯の食える商売にならなければ私にはならないのではないか、どうしてならないか。ただ歴史が浅いからだけではないのです。

潟沼 やっぱりそこに言語が霊だけが大事で言がどっかへ行ってしまうているところがあると思うのです。つまり、例えば国語学の講座を持っている大学でも、恐らくそれを日本語として意識しているか、あるいは非常に少ないのではないかと思うのですが、ただ幸いにしてこれはそれとは関係ないのですけれども、結構例えば日本と日本文化というものをどういうふうに語っていたらいいかという論文だとか、それから日本語の特徴だとか、それから日本語研究とその習慣だとか、それから言葉の研究だとか日本語学を志す課題とか、こういうような意識がだんだんやっぱり我々の専門分野でも出てきているということがあるのです。

だから、こういう流れの中でより基礎的な研究と、それをどう応用していくかということとは大切な課題です。やっぱり日本語研究というものがもはや国語学の今までのような概念の中で、その課題の中でやろうとしたってもうだめだというのは大体わかってきているのですけれども、両者の間に横たわる距離で

すね。それから、行政がそれをどう受け止めて発展していくようなそういう施策を講じるかというようなところも含めて、いろいろな問題があると思いますが。何かこれだけで終わらせないで定期的にまた集まったりほかのいろいろな方ともまた交流したりして、札幌でも何かぜひそういう形としてもっと具体的に目に見えるようなものにしていけたらいいなというような気がします。

赤坂 最高です、ね、そういうことは。できそうです、ね、でも。

松本 実際しかし先ほど日本教育振興協会の話が出ましたけれども、現在日本協会振興協会に加盟している学校が日本で四九〇ぐらいですか、これは主に中央の学校が非常に多いのですけれども、これは日本語の教育施設であって、専門学校でも各種学校でもない、全くの教育施設です。そういうところでもって日本語教育が行われている、そしてその日本語教師に対する見方は職人芸、日本語を教えるのはタイプストやワープロのオペレーターと同じぐらいに、日本語を教育するのは一つの職人芸である、こういう見方しか実質的にされないし、実質的にそれだけの報酬しか受けてないのです。だから、東京あたりだったならば四つも五つもの日本語学校をかけ持ちして、その日本語の先生がやっとやっていける、こういうありさまです。

ですから、私はその日本語教育というものを振興させていく、進めていく、火の手を上げていく、もう一つ逆の点から日本語の先生というものをもっと社会的に、あるいは国なり行政なりというものが、それに価値を与えていかなければならない、付与していかなければいけないのです。

赤坂 これは先生、教える先生の態度にも、対応の仕方にも責任があると思うのです。例えば、日本語ですと、自分が使っている言語ですから、教えるのは自分にすら価値を認めてないというところにも問題があるのではないかと思うのです。ですから、やはり日本語を教えるためには、それなりの教育を受けて、勉強をして教えるのだという意識は、まだ持っていないのでないのでしょうか、どうでしょう、これは。

潟沼 僕の教え子が中国に日本語を教えに行ったのです。一回目は見事失敗して帰ってきたのです。といいますのは、中国語がわからなかった。先ほど先生もちょっと触れておられました、国というのは母国語に精通しているか精通していないかということが、その言語を教える際に大事なポイントになっていきます。粗製乱造といったらなんですけれども、やっぱりそういうような傾向は排除して行かなければなりません。

長い年月かけてじつくりと本当に立派な日

本語の教師を育てなければならないのです、時代がどんどん変わっていった、そういう人たちがどうしても必要になってくる時代が来つつあります。

いわゆる海外協力隊みたいな形もいけれども、やっぱりもっとじっくり腰の落ち着けた交流をお互いにもっとしたらいいと思うのです。日本の中学校や高校でも、札幌に何人かの英語の先生来てかけ持ちするというよりも、各学校に一人いた方がいいと思うのです。国立大学そういうふうになってきてますけれども。行政もそういうことを考えてみたいと思いますのです。

赤坂 そのとおりだと思います。ただ時間がかかります。何とか本当にしなければならなと思うのですけれども。例えばフィリピン占領時代のアメリカが、フィリピンで英語教育を広めようといって、船に六百人ぐらいの

アメリカ人の若い青年を、英語教師として連れていったという話があるのですが。五、六百人ですよ。一つの船に乗せて、連れて行って、そしてその人方みんなフィリピン全国あちこちにちらばって英語教育を始めたそうです。

松本 あの広いアメリカが、そして行く人が本当に日本語をもし教えるのだったら日本語教育というものをしっかり勉強しておかなければならない。私本当にもう全くのビギナーに教えるときには、何は何です、いわゆるコブラ (copula) から入る。それから人称代名詞、指示代名詞を入れる。とにかく初めは動詞は使えないわけです。自動詞が使って、さらに他動詞が入ってくると表現も大分豊かになってくる、形容詞、形容動詞が出てくるというふうな格好でもって、本当の日本語を教えるというには当然段階があるわけです。そ

ういうものをきちっと踏んでいかなければ、これは直接法なのですけれども、直接法の場合にはとにかく媒介語が使えない、こっちは豊富な語彙を持っているけれども限られたものしか使えない、その限られたものでもってどういうふうに積み上げてどういうふうに育てていくかと、これやっぱり勉強していかなくては、あるいは日本語日本人ですからではダメなのです。

湯沼 赤坂先生は、相手の持つ言語によって教授法が変わるような教授法の確立が必要だとおっしゃいましたが、日本語がそのような状況にさらされているということを肝に銘じながら、この座談会を終わらせていただきます。